



TITLE:

花山だより(7月) (日食報告號)

AUTHOR(S):

月斗

---

CITATION:

月斗. 花山だより(7月) (日食報告號). 天界 1936, 16(184): 415-415

ISSUE DATE:

1936-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167267>

RIGHT:

## 花 山 を よ り (7 月)

稀有の天運に恵まれて日食観測も無事に終つた。正に100%の成功である。北海道も満洲も更に遠くオムスクも、吾々の仕事は漸やく其の半ばを終へて残された仕事は其の結果の整理發表である。

7月13日ワルソ1から日食遠征に來た Olczak 氏訪問さる。山本臺長の案内で臺内を一巡、臺員と雑談を交へて辭去さる。14日は木邊氏が撮影の9mmを携へて來臺、一同大はしやぎて映寫、某氏のヂエスチュア1滿點、何回も映寫してヒヤカス事、紀念に1枚引き延して贈呈に一決。17日は上斜里で不幸曇られた Cambridge の Solarphysics Observatory の Stratton 博士と印度の Kodaikanal Observatory の Royds 博士來臺、花山の日食寫眞を見て Very fine と云はれたには誠に御氣の毒な思ひがした。兩氏は數日京阪神奈良を見物して只今は猛颱風を漸やく通り越して歸國の船上にある筈。18日東京天文臺より下保彗星發見の電報來る。早速總動員して待期したが相憎の雲と西天の街の灯に禍されて逃がしてしまふ。明日より早速役割を定める。19日 Stratton, Royds 兩氏を迎へて琵琶湖ホテルで第2回黃道光會議を開催、詳細は何れ報告される事であらう。この日も天候不良で Comet は駄目。翌日も雲の爲め駄目。21日、この日は大體雲は取れたが、尙少しの薄雲が残り且街の灯の明りで微かに其らしき吻を見たきりで觀測不能。今後は到底駄目と斷念する外無からう。Peltier 彗星は銀河の中で次第に尻尾を延ばし肉眼でも樂々と判る様になつた。花山でもずつと觀測を續ける豫定。Nova も彗星と並んで微かな光を投げてゐる。日食の話會を19日夕刻より京星會の主催で開催したが、狭い部屋に滿員で聞く者も話す者も玉の汗。25日は花山で協會の例會であるが、この日は思ふ存分微風に吹かれて日食漫談に花が咲きさうである。木星や彗星の觀望にも絶好の時である。花山では本月半ばから夫々休暇に入つたが責任者は交替で天界の珍客、星の戸籍調べに十分の接待はかゝさぬ心算である。そろそろ夕涼みと街の粹人が押しかける頃となつた。

(7月24日、月斗生)